



Title	「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告
Author(s)	吉原, 卓男
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 196-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52860
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」・調査報告

吉原卓男／大阪芸術大学 環境デザイン学科

数年来、大阪に始まり、各都道府県の県庁所在地における都市空間を俯瞰することによって、都市空間における環境デザインの地域性、独自性に関する調査研究をすすめてきた。ほとんどの都市は、第二次世界大戦時の米軍の空襲により被災し、再建された都市である。再建で得たものは、近代といいう一元的な価値観の様式による、地方色を無視した個性のない均質な都市空間であることを知った。戦災を免れた都市も結果的にはその後の高度成長とバブルによる都市改造で戦災と同じ一元的な近代化の様相を示している。一方で、空襲や戦後の近代化の洗礼を免れたものもある。それらの都市や集落は、僅かではあるが、独自性を失うことなく今にその姿を保ち続いている。いわゆる伝統的町並みや伝統的民家である。研究テーマ「環境デザインの地域的特性を造形との関連性において考察する」の調査対象としたものは、そのような歴史的、時間的継続性をもって形成された伝統的な都市及び集落の町並みや民家である。対象のなかには、行政（文化庁）による重要伝統的建造物群保存地区及び国指定重要文化財民家の指定物件と重複するものもあった。そしてほとんどの指定物件は、指揮によって一律的な修復がなされていた。しかし、それら物件を含めて、多くの家並みや建造物に接することにより、人々の長年住み暮らし、育んできた「町家・民家」とその背景に広がる街並みの景観や自然に庶民の伝統的美意識を知覚し、それらをうかがい知ることができたと考えている。調査では、環境デザインの特性についての原則を得るために偏りのないデータを出来る限り幅広く求めた。そのためには、一般的に集落形成の分類において歴史地理学的に習知の集落分類と、(b)、形とか雰囲気といった感性に関わる部分で日本の伝統をよく保持し、他と区別される都市・集落についても注目した。

a 集落形態を歴史地理学的な分類法によって分類し、その環境デザインが歴史的・時間的継続性をもって醸し出された固有の「かたち」を持つもの。

1 街道筋に開かれた宿場としての集落

2 門前町・寺内町としての集落

3 港町

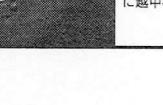
4 産業都市

5 在郷都市

6 城下町

b 集落の環境デザインを構成する様態が、始源の「かたち」を伝えもつものとして、あるいは固有の「かたち」をはぐくみ持つもの。

これら始源の「かたち」、あるいは固有の「かたち」を持つとされる集落及び町並は、かつての海上輸送を担った廻船を利用した海の道、内陸部と平野部を結ぶ高瀬舟などによる川運の川筋に沿った川の道、或いは、いく筋もの陸の道によって、みやこ（京・江戸）の文化が全国各地に伝えられ、山々に囲まれた郷や盆地で、それをつくる技術と共に土地の環境に育まれ熟成され独自な色合いを持つものとして受け継がれてきたのである。そして、この熟成された伝統文化を伝える「かたち」としての家並みと民家が創り出す景観は、いつしか「小京都」・「小江戸」と呼ばれた。それはこの国の人々がもつ都市の始源の「かたち」への共通のオマージュなのであろう。調査では、様々な道と郷や盆地に注目した。パネル発表の作品は、塚本学院教育研究補助費を得て、平成13年～15年のあいだにおこなった調査（文献・現地）を基に、項目別にその特徴を報告書によらずリスト化したものである。なをリストの集落・町並は120ヶ所を越える中からの一例である。

所在地	番号	写真	調査地 地理的位置	地理・歴史的形態 町並みの成立	町並（町家）の表構え 構成とその要素 その他	町並みの特徴
青森県	1		黒石市中町・黒石市は、青森県中央部、浅瀬川局状地の扇頂に位置。中町地区は旧黒石市街地の中心部。	宿場町（黒石山形街道）…明治2年（1865年）陣屋の築造と同時にすでにあった町並みに侍町・職人町・商人町を加えた町割を行う。「こみせ」はこの時に作られた。	屋敷規模は多様で、間口2.8～23.6間、奥行1.8～45.5間。切妻造・入母屋造が混じる。鉄板葺き（木本）、青森ヒバ材でつくられる。町並みの低い中二階建、妻入り、真壁造、櫛引上げ戸。	中町通り（南北のびる弘前方面から青森方面へ向むける旧街道沿いに発展してきた）の「こみせ」は、江戸時代から今に残る木製アーケード状の通路（幅が1.6m前後、軒高は2.3m）。冬季、櫛引上げ戸を街並の柱の間（一間隔離）に入れて、積雪や吹雪から人を守り、軒をねねていた旅籠や、商家にとってではなくてはならない蔵置となる。
秋田県	3		角館市……秋田県のほぼ中央、横手盆地北部に位置。	城下町……角館町の城下町形成は、元和6年（1620年）芦名氏が現在地に移り住んだことに始まる。城下町角館は、このときの町割りが原形。	武家屋敷の間口は、平均約18m。茅葺きの武家屋敷は建築用材として腐食し難い杉を使用。町家は間口を2～4間に制限。多くは杉葺きの二階建で道路に面して雪除けを設置。	旧武家町の広い通り沿いに坂場が連続し、坂に沿ってシダレザクらやモミの木が深い木立を形成。藩政期末期の屋敷割を踏襲し、屋敷は茅葺の主屋や門・蔵で構成。建設当初に領主に京の公家からの興味があり、京を意識した町造りがなされ、みちのくの小京都と称された。
宮城県	6		村田・柴田郡中央に位置。中央部を松川が西北部から南流。南部は水田の広がる村田盆地、北部は山地、盆地の東西を山地が囲む。	商家町……奥州街道大河原宿から北上。羽州街道の川崎宿には至る街道筋村田盆地に町場が形成される。江戸期には紅花や藍を南側地方で販賣し、江戸や上方と取引。	店蔵造り、二階建て、切妻・平入、桟瓦葺き、置屋根形式。通りに面して一間程度の下屋庇、二階は親子窓が開きの土蔵。二階は通りに面して全面開放で干本格子引き戸、腰高な海馬壁。	中央街の南北に通る約700mの道路の両側に古い商家が連なる。道路を挟んで短冊形の敷地割りで間口が狭く奥行きの深く敷地南側に、表から奥に通じるトオリニワを設け街路に面して立て込みを特徴とする。今もお街道両側に多くの古家が残る。
福島県	8		下郷町大内宿……会津若松の南の山岳地帯にあり、会津若松から日光街道の今市宿に至る南山通りの宿場町。	宿場町（南山通り）……敷設当初（17世紀初め江戸二期）は会津と関東を結ぶ最短の輸送路として賑わう。江戸中頃には白川街道が整備、次第に廃れる。	茅葺き寄棟造り妻入り、街道に面した軒を「さがい造り」又は化粧垂木で飾る。宿場時代、街道に面した妻側に二層の座敷を並べ縁側を設け、客室として使用。今は観光客に土産物を並べるミセとして使用。	山間部の半農半宿の集落である。街道（南北に約400m）を挟んで、おもに40～50坪の茅葺き寄棟造りの主屋妻側を街道に面して45戸家屋が並び正しく並ぶ。家の南側は奥の土間入口への通路と作業空間を兼ねたニワである。かつて中央にあった水路は、今もなお街道両側を豊かな水量で流れている。
千葉県	10		佐原市……佐原市は千葉県の北東部、霞ヶ浦に注ぐ利根川下流域に位置。	商家町・川原（利根川）……利根川沿いの中心であり、穀物の集積、商業、酒・醤油の醸造業用の水運とも密接に関連、河港商業都市として発達。	木造真正壁造、蔵造・塗造、切妻、寄棟、平入、平妻入、平家建、二階建など多様な建築様式。	利根川支流・小野川とそれに交差する街道沿いの町家や土蔵の町並みと柳並木や荷揚げ場の「たし」が河港商業空間の一つの景観を特徴と並んである。水路で江戸と直結していることから、江戸の影響を大いに受け小江戸とも呼ばれる。
長野県	23		南木曾町妻籠宿……急峻な地形に囲まれ、木曾川支流犀川によって形成された小盆地、標高420m前後に立地。	宿場町（中山道）	元石置き板葺、鉄板葺に改造、切妻、平入真壁に二階建。表構えは、一・二階の出桁で深い軒、二階向塗壁塗	昭和51年9月に妻籠宿が、文化財保護法による日本で最初の「重要伝統的建造物群保護地区」に選定。木曾路には宿駅制度によって11宿があったが妻籠は一番小さな宿場であった。宿場は南北に貫く中山道に沿って、北から下町・中町・上町があり、柳形を挟んで寺町の町並みが続いている。
岐阜県	30		美濃市養濃町……長良川中流とその支流取川・片知川などに沿った地域。	商家町……金森長近が小金山に築城城下を整備。屋敷地は江戸期には道路に面する間口により年貢が課せられた故、間口が狭く奥行きの長い短冊状の町割。	切妻造り木卯建、平入り、中二階、漆喰塗籠窓、桟瓦葺、格子、煙出し、オタレ（下屋の出桁の下に架け渡される幕をかけるための材）バッタリ。	金森長近は一生に3つの町を作った。越前大野・飛驒高山、最後のかに有知（美濃）。いずれの町も城を中心いて下町を造り、戦いよりも経済を中心とした。上有知では美濃と紙の製造、販売による繁榮、伝統的な塗籠造の民家が軒を連ね「卯建」に象徴される町並は江戸から明治・大正及び昭和初期に建築された。
新潟県	36		津川……下越地方の南東部、阿賀野川が津川盆地を流れ、中央部を北流する常流川と阿賀野川が合流する河岸段丘に位置。	宿場町・河津……会津街道と阿賀野川の水運を結ぶ大陸の中心地。津川船道の起点として繁榮。六歳市が立ち、米と新潟湯からの塩・衣類などの交換で賑わった。	街道沿い約1kmトンボの町並が続く。鉄板葺き、2階建て、真壁、上町には切妻、平入り、仲町には切妻・妻入りが多く見られる。私有地を公共のものとして使うトンボは雪の多いこの地方の生活道路。	慶長15年大火があり、町中残らず消失。津川城主岡重正はこの機会に整備を行った。本町内173軒はすべて板屋根とし商売を許し、端町は板屋根、商売とともに許可しなかった。平板造りという庄をつけた。これが雪国の大雪（津川ではトンボ）だが、会津地方では津川以外はついていない。
富山県	40		八尾町……神通川の支流、井田川が平地に流出する山麓に位置する。北に越中平野の村々を望む。	門前町（聞名寺）……洪水によりより耕地を失ったとき、寺の高台に移住。寛永13年（1636年）成立。	元は石置き板葺、桟瓦・鉄板葺に改道、切妻、平入り形式の二階建で、出桁造。	井田川と別荘川に挟まれ細く長く広がる坂の町・八尾。井田川沿いから眺めるよのうな斜面に石垣が積まれ、その間を絶えようなく上の方に向かっていくものの石段と坂の小道がつながり続いている。

所在地	番号	写真	調査地 地理的位置	地理・歴史的形態 町並みの成立	町並（町家）の表構え 構成とその要素 その他	町並みの特徴
石川県	41		金沢市・茶屋町……卯辰山西麓の浅野川沿いに位置。	茶屋町……文政三年（1820）近辺に点在の御茶屋を集め町割。	元は石置き板葺、桟瓦・鉄板葺きに改造、切妻、平入り形式の二階建て。	通りに面して一階を削りの出格子、背の高い二階には吹放しの縁側と座敷を備える姿は藩政末期以来の茶屋建築の特徴。茶屋建築の第一の特徴は、弁柄塗りの出格子。その細かい本格子は「キムスコ」と呼ばれていた。京都の影響を受けた「お祭り」や文化的な繋がりから小京都といわれる。
三重県	48		三雲町市場町……重県の中央部の海沿い、三渡川の右岸低地域に位置する。	宿場町（伊勢街道）……蒲生氏郷、天正16年（1588）、道路整備、道沿いに新しく集落を形成。	切妻造、厨子二階建水切り庇付き出格子、妻入、或いは中二階建、平入。桟瓦葺、一軒軒庇は瓦葺、幕板付。外壁は押縁下見板。出格子、格子戸。	敷地の北側の主屋を建て南側に庭を確保。間取りでの共通点は、街道に面した主屋の中より南側に出入口を設け、その南側に「女中部屋」、その奥に「だいどころ」・「かって」などの部屋が続く。明治中期から大正初期にかけて市場町の町家のファサードに大きな変化が起こる。ミセ全面を解放する振り掛け戸の必要性が無くなり出格子に変化する。
滋賀県	53		西浅井町・菅浦……琵琶湖北部葛籠尾半島先端に出来た小湾の湾奥にあり背後は急な山腹傾斜面が迫る。	漁村集落（琵琶湖）……天皇に食料を献上する贊が、この中に住み漁業を営んだのは、平安時代以前とされる。	切妻、妻入り。平入りの混在。浜と居住地区の境に祓除石。各住戸の屋敷廻りにも浜垣に石垣の無いをめぐらし水害に備えている。	中世の頃から自治的村落共同体「惣」を組織。四足門の内側に余所者は住めず、里の者でも道理に反する行為があれば門外へ追放するなど、惣の掻によって嚴しく裁かれた。
兵庫県	63		佐用町・福平……千種川支流佐用川中流域、利神山（山上に城郭）西麓。	宿場町（因幡街道）……利神山上に城郭、街道沿いに町人町を慶長15年（1610）に現在の地割形成。町並は城下町よりも宿場町、在郷町としての商事が多く見られる。	切妻造、平入。本瓦又是桟瓦葺、中二階、白漆喰壁又は土壁、一部真壁や黒壁、虫籠窓、格子、一部煙出し、駒つなぎも残っている。	街路の東側を流れる佐用川沿いの石垣の上に建ち並ぶ白壁、土壁の川屋敷、川座敷。土蔵等が造り出す川筋の景観には特有なものがある。街道筋の民家軒下を溝には清流が流れ、生活用に利用した上水道の流れで、下水路は上水道や道路の下を横切って、全て佐用川に流れいで上下水道を巧みに交差する工法がとられていて。
岡山県	68		成羽町吹屋……成羽の町から成羽川の支流を北に約9km遡った吉備高原の町（標高約500m）。	ベンガラと銅山の町……銅山の歴史は古く、江戸期は幕府直営の銅山。19世紀前半から弁柄の生産。明治になると三菱の所有、一時は日本三大銅山として隆盛。	町並みは、古い形式の家屋は切妻に下屋をついた妻入、中二階建てで新しいものは、入母屋造、妻入が主で平入は僅か、二階建て。屋根は石葺き瓦葺。白漆喰壁と弁柄入りの土壁が混在、海鼠壁、ベンガラ格子。	赤褐色の石州瓦とベンガラ色の外観で統一された、見事な家並みが整然と続く町並み。
鳥取県	74		米子市…県の最西端に位置して島根県に接続。大山東麓、加茂川の河口に海に面し米子湊を持つ。	城下町（米子城）……慶長6年（1601年）、中村忠が城主となり、米子城の築城、城下町の整備を行う。	切妻・平入、桟か藁葺き、中2階建てで虫籠窓で出行造の軒は漆喰塗込造。一階は真壁、千本格子の鎧込み戸。加茂川沿いには商家の土蔵離れ屋敷が並ぶ。	江戸期、米子港を中心とした商業の町として発展。港に近い加茂川沿いの町人町には鹿島家や後藤家などの米屋・造船問屋などの豪商の屋敷が立ち並び繁栄していた。
広島県	79		福山市鞆……福山市の南部、沼隈半島の先端部に位置する。背後に急峻な山をかかえるた波静かな入り江に面す。	港町……江戸期には上関、瀬戸、牛窓、室津などと西回り航路の最重要港として栄える。明治以降交通手段の変化と共に衰退。	間口が1間半～2間と狭く深い奥行きを持ち、隣家と外壁を共有する独特的構成例も見られる。一方で切妻・入母屋造、平入・妻入が混在し、それぞれ本瓦葺の重厚な商家と、多様・多種な家屋がみられる。	鞆の町並みとして、江戸期の建物が約80棟残されている。町は歴史資料館のある小高い丘により南側が古い時代からの港町。港町特有的細い路地があり組み、路地に面しては間口の狭い家が続き、独特の町並みを作り出している。
徳島県	85		脇町・南町……徳島県西部に位置し吉野川の中流域北岸に位置する。	在郷町……江戸期藍染が阿波の代表的産業、陸上交通と吉野川の水運に恵まれた脇町は藍の集散地として栄えた。	伝統的な町屋、22・50戸が、間口四間半以上。敷地の奥行きは深く、80m以上を超えるもある。切り妻造・入母屋造、平入・妻入が入り混じる。本瓦葺、中二階、塗籠の虫籠窓、格子、出格子、本瓦寄棟・鬼瓦付袖卯建。	近世に発達した吉野川中流域の在郷町として、江戸時代中期以来の町家構造が多い独特の重厚な意匠の町並みを残し、特色ある歴史的環境を形成。町並みの中心は南町で東西通り430mに短冊形地割りで、切妻造・平入、街道に向かって鬼瓦を乗せた特徴的な袖卯建の町家が連なる。
高知県	88		室戸市吉良川…高知県東辺に位置する吉良川町は、江戸時代に高知から室戸に至る浜街道沿いに形成。寛政6年（1794）には整備された。	在郷町……明治～昭和初期の間、良質の木炭集散地として繁榮。街区の旧街道沿いの幅幅計画は市民の反対によりハイバスを建設、町並みを保存された。	町並みは、中2階建、切妻造・平入、漆喰塗籠窓。外壁は下見貼り、水切り瓦。海鼠壁の区分別。商家には玄関前に閉じれば両戸、開ければ広縁になる上下開锁「ぶつこう」がつく。	集落は、海岸に近い下町地区、山側の微高地の上町地区よりも下町は、東西に幅員2～3間の土佐街道に沿って南側に短冊形敷地（間口4～5間）の両町朝。隣家との間に屋根のない3尺～1間程度のトオリニワがつく。上町地区は結衣街と屋敷の周囲に「いしきぐろ」と呼ばれる石垣塀を巡らした農業型の地割りで方形である。
愛媛県	91		内子町八日市護国…四国山地から西流した小田川と中山川及びその支流龜川が町域の内山盆地で合流。	木蠅の町……文久年間白蟻製造で、飛躍的に発展、最盛期の明治中期には、国内の主要生産地となる。	入母屋・切妻が混在、平入、漆喰塗籠窓、虫籠窓、海鼠壁、影物付き格子、鎧込みの壁。桟瓦葺、節戸、バッタリ。	浅黄色と白漆喰の塗籠造の重厚な外壁、平入りで、街路に連続した壁面が際立つ。他では見られない隣家との間の小路や水路による路地空間。外壁の漆喰壁はさまざまな繪絵が鮮やかな色調で描かれ往事の繁榮を偲ばせる町並みである。
高崎県	94		日向市美々津…耳川の河口に位置	港町……集落構成の成立期は詳らかでないが元禄2年（1689年）頃には、現在と同規模の集落が成立している。	妻入、平入の混在。土蔵造、虫籠窓、格子窓、一階に岡出格子、格子戸、バンコ（床几）、二階に海鼠壁と漆喰の戸袋。正面戸の前面両端に漆喰塗の戸袋。家の様式は、時代や町内の性格を反映して多少異なる。	耳川の河口に位置する港町で江戸時代には高鍋藩の商業港。地区は上・中・下町に分かれ3本の土道路やヤツカヌケと呼ばれる防火路など昔の区割りが残り、幕末から明治、大正、昭和期の町家が混在。
佐賀県	98		鹿島市・浜津地区…浜宿に接する浜川河口に位置し有明海に通じる漁港。北は有明海に面する。	漁村集落……長崎往還に面した鶴岡町の庄津・金屋地区と、河口対応した魚津の漁村地区とに分かれる。	魚津地区は平屋及び中2階建が多く、街道筋は中2階建が多くみられる。屋根の形式は入母屋造及び寄棟、平入、藁葺、下屋部分は瓦葺。	浜川を挟んで北舟津、南舟津と呼ばれ、漁民の家は川に面して形成されていたが、河港に面した町並みは河川改修のために大幅に解体され川に面した景観は失われた。船津の集落は干拓等によりかなり内陸に追いやりられているが、浜川の南岸にある地区には、茅葺、藁葺の民家が今も僅かに残っている。
福岡県	101		吉井町・筑後吉井…耳納山地北麓から筑後川左岸にかけて位置し、中央を巨瀬川が流れる。	在郷町……商品作物の集散・加工を担む在郷町として、明治期には「庄屋蔵」が立ち並ぶ豊かな商業都市として発展、最盛期の初期にはほぼ現在みる町並みを形成。	町家型……入母屋造、妻入、土蔵造、白漆喰塗。絞り羽根張墨壁又は海鼠壁。2階庇付窓、鉄扉。1階は摺上戸戸、格子戸、櫻型敷、正面戸・敷地間口広く、矩形。周りに塀・垣、門は構え、袖蔵の配置もある。	豊後街道沿いに漆喰塗の重厚な町屋が連続する町並みと災除川と南新川沿いに広がる屋敷群。明治2年の大火を契機として、草葺きの町屋にかわって瓦葺塗造が普及し始める。大正期に入って重厚な町家が立ち並ぶ景観が完成。
沖縄県	103		那覇市金城…沖縄本島首里城南の台地斜面に広がる地域、安里川に臨む。地名は城の美称である。城下の村を意味する。	城下町（首里城）…尚真王の時代（1477～1526）に首里城から南部への主要道路として整備。	金城町は、かつて王朝に勤務する士族たちの住む城下町。道路沿いに方形の屋敷割りによって形成されている。その道路は、琉球石灰岩を用い、石の表面に刻みをつけて滑らかに配慮がされている。	昭和二十年の沖縄戦当初焼夷彈によって焼き尽くされ、遮蔽物のない裸の町となる。そのために日本軍の隠れる場所がなくなり、その後の猛砲撃による破壊を免れ、焼け跡に琉球石灰岩の石畳と切石積みの屋敷囲いの石垣が残され、再建された赤瓦の家並みが昔の面影を伝える。

【参考文献・資料】『角川日本地名大辞典』角川書店、『スーパー・ニホンカ2003』小学館、『日本民家語彙解説辞典』日本建築学会民家語彙集録部会編纂、紀伊国屋書店、『椿川村教育委員会編、『続探訪・奈良井宿』『町家点描』』藤島亥治郎、藤島幸彦、学芸出版、『町家謹訪』藤島亥治郎、他著、学芸出版、『風土の意匠』・浅野平八著、学芸出版社、『大名の日本地図』中嶋繁雄著、文芸春秋、『妻籠宿』小寺武久著、中央公論美術出版社、『山中道69次を歩く』岸本著、信濃毎日新聞社、『上総の旅』シマウマクラブ編集、昭文社、『蔵・高橋源著、交趾社、『佐原の歴史散歩』島田七夫著、たけしま出版、『胡戸内町の町並み』谷沢明著、未来社、『竹原市伝統的建造物群調査報告書』竹原市、『日本の町なみデザイン』益田史男著、グラフィック社、『中国地方のまちと風景』日本建築学会中国支部、中国地方まち並み研究会編、中国新聞、『土佐の民家』高知新聞社編集部編、高知新聞社、『民家と町なみ』信濃毎日新聞社、『日本の伝統美とヨーロッパ』宮元健次著、世界思想社、『歴史の町並みとみ辞典重版伝統的建造物群保存地区総集』吉田桂二著、東京堂出版、『別冊太陽・日本の町並み3（近畿、東海、北陸）』三沢博昭、小野吉彦監修、平凡社、『別冊太陽・西川幸夫監修、平凡社、『別冊太陽・日本の町並み3（関東、甲信越、東北、北海道）』三沢博昭、西川幸夫監修、平凡社、『別冊太陽・京都 古地図散歩』構成、伊東宗裕、平凡社、『肥前浜宿、鹿島市浜宿伝統的建造物群保存対策調査報告書』鹿島市教育委員会、『愛媛県内子町伝統的建造物群調査報告書』内子町八日市周辺並み保存対策協議会編、『建築家秀吉』元宮健次著、文芸出版社、『日本 町の風景学』内原昌著、草思社、他